

まちづくりと地域ブランドの現場から

アートがまちの存在を変える

越後妻有地域(新潟県十日町市・津南町)

ナビゲーター
大地の芸術祭実行委員会
(十日町地域広域事務組合)



中里エリアには、作家であるリチャード・ウィルソンの自宅の実物大の構造を、方位を保ったまま移動させた「日本に向けて北を定めよ」(74 33 2)があり、独特の景観を生み出している

里山に現代アートが点在する

新潟県南部に位置する十日町市と津南町の二市町を合わせて「妻有地域」と呼ぶ。ここでは現在、地方自治体の行政の枠を越えた地域づくりが進められている。その事務局となっている十日町地域広域事務組合の金崎隆行さんは、「もともとは、地域づくりのために『越後妻有アートネットワーク整備事業』として、四つのプロジェクトが進められてきたのです」と説明する。写真と言葉のコンテストである「越後妻有8万人ステキ発見」(二〇〇キロを越える幹線道路を花で飾る、花の道)、各市町の特徴を活かした施設の整備を進める「ステージ整備」。そして、「これらの三つの事業を有機的に連携させ、さらに継続発展させていこう」というプロジェクトが、大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ(イタリア語で三年に一度の展覧会)である。

「自然と人とアートをテーマに、平成二二年



十日町市の中心を流れる雄大な信濃川

森から地域を学ぶことを目的に建設された里山の自然科学館「キョロ口」(手塚貴晴+由比作)。ひと際目を引く塔は、高さが34mもあるが、豪雪地帯だけに、真冬にはこの塔だけが雪の中から顔を出すという。内部には、近隣の伝統的民家の居間が移築されていたり(写真下右)、冬期間のみ自然の素材を使って、おもちゃが作れる「チャレンジ工房」も開かれる(写真下左)



川西エリアにある「ナカゴグリーンパーク」では、日本の現代美術をリードしてきた斎藤義重の「時空」や、藤原吉志子の「レイチェル・カーソンに捧ぐ〜4つの小さな物語」(写真)といった作品を観ることができる



高さ4mの人型の枝と柱が畑の真ん中に悠然と立つ、トーマス・エラー作の「人 自然に再び入る」



作品近くの道路沿い(脇)に立っているカラフルな案内板も作品の1つ(ジョゼ・デ・ギマランイス作)



建築物としても話題を呼んだ「光の館」(ジェームズ・タレル設計)は、妻有地域の重要文化財である家屋「星名邸」がモデルになっていて、宿泊も可能



信濃川沿いに設置された「いちばん長い川」(オル・オグユイベ作)は、ダムのために水が少なくなった信濃川の「川の記憶」をテーマに公募された高校生の詩(選・大岡信)が18本の電柱に刻まれた作品

十日町地域広域事務組合

【事務局】

〒948-0036 十日町市北新田1番地10

TEL 025(757)2637

FAX 025(757)2285

URL <http://www.echigo-tsumari.jp/>

夏に第一回を行い、その後、平成一五年夏に第二回、昨年の平成一八年夏に第三回を開催しました(金崎さん)。

第一回は、三二カ国一四七組のアーティストが参加し、五〇日間の会期中に約一六万人の人が訪れた。回を重ねることに来訪数は増え、昨年行われた第三回は、何と世界四〇の国と地域から二〇三組のアーティストが参加し、約三五万人が訪れるまでの規模になった。「最初は、地方公共団体の枠を越えた事業に加え、現代アートが一般の方々に受け入れられにくかったこともあって、一回目の開催は、一言では言い表されないぐらいに大変だったそうです」と金崎さんは言う。だが今では、七六〇平方キロという広大な面積の場所に、しかも野外を中心に作品を配する展覧会は、世界でもここだけということもあり、インターナショナルな芸術祭までに成長している。

これまで展示された作品のうち一四〇点余りは、そのまま残され、冬期間を除いてその多くが鑑賞できることから、見学のために今も足を運ぶ人が多い。「作品は点在していますから、その移動の間に、日本の原風景とも言える里山や棚田に出会い、あるいはホスレタリティ溢れる住民の方々と触れ合うことで、この地域の魅力を知ってもらうきっかけになってもらえれば」と金崎さんが言うように、単に経済的な成果だけでなく、地域コミュニティの醸成に役立ち、地域間・世代間交流を新たに生んだ「大地の芸術祭」がもたらしたものは計り知れないだろう。

(文責・CEL編集室)